

Title	体験なき戦争の記憶の現場：日本海海戦記念式典の観察より
Sub Title	The memory of the battle of Tsushima without war experience : ethnographic research on the commemorative ceremony of the battle of Tsushima
Author	塚田, 修一(Tsukada, Shūichi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.87- 98
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0087">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0087</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 体験なき戦争の記憶の現場

——日本海海戦記念式典の観察より——

The Memory of the Battle of Tsushima without War Experience:

Ethnographic Research on the Commemorative Ceremony of the Battle of Tsushima

塚田 修一

### 1. 目的と先行研究の整理

(1)

本稿の目的は、神奈川県横須賀市に所在する記念艦「三笠」において執り行われている日本海海戦記念式典の観察を通し、日本海海戦という過去の出来事をめぐる営みの現場を考察することである。特に、この現場においてどのようなことが起こっているのか、またいかなる営みが可能になっているのかを考察していく。本稿では、2015年5月27日に執り行われた日本海海戦110周年記念式典を主な考察対象とする<sup>1)</sup>。

本稿が念頭に置くのは、日本海海戦記念式典における「体験の不在」である。当然のことながら、当式典には日本海海戦の体験者は存在しない。では、この「体験が不在」となった、戦争の記憶をめぐる営みの現場において、どのようなことが起こっているのか、またどのようなことが可能になっているのか。本稿の関心は、それに向けられる。

(2)

本稿を先行研究の中に位置付けておこう。日本海海戦記念式典を考察する本稿はまず、過去の出来事についての記念・顕彰行為に関する研究として位置付けることができる。その先行研究としては、例えば阿部安成は、横浜の開港記念日がどのように記念されていったのかを考察し、横浜という都市をめぐる様々な記憶と「ネイションの物語」との相克を明らかにしている(阿部 1999)。さらに、戦争の慰霊行事における儀礼に関する先行研究を参照することもできる<sup>2)</sup>。福田雄は、長崎市の原爆慰霊行事における儀礼の通時的変遷をたどり、儀礼の中で「われわれ」という主体と時間が操作されることによって、原爆という経験が現代社会に適応するものとして編成されようとする過程を明らかにしている(福田 2011)。

しかしながらこれらの研究の殆どが、記念・顕彰行為や儀礼の「経時変化」に着目し、いわば歴史社会学的に考察するものである。それに対して本稿が試みるのは、日本海海戦という出来事に関する営みの「現在」を把握することである。本稿が採るそのようなアプローチを、浜日出夫は歴史社会学に対置させて、「歴史の社会学」と呼ぶ。「歴史社会学が過去に起こった出来事を明らかにしようとするのに対して、それは、人びとが過去に起こった出来事を現在の

塚田修一「体験なき戦争の記憶の現場——日本海海戦記念式典の観察より——」

『三田社会学』第23号(2018年7月)87-98頁

ように捉えているのか、またそれに基づいて現在どのように行動しているのかを明らかにしようとするものである」(浜 2007: 182)。この表現を借り受けるならば、本稿は日本海海戦という出来事に関する「歴史の社会学」の試みである。

さらに本稿は、日本海海戦の文化的記憶の表象に関する考察として位置づけることが出来る。文化的記憶の表象に関しては、P. ノラによる『記憶の場』プロジェクト (Nora 1984=2002) を始めとして、パールハーバーの文化的記憶の歴史の変容を描出したローゼンバーグの研究 (Rosenberg 2003=2007)、さらにはアメリカ社会におけるベトナム戦争やエイズの流行などの記憶表象を考察したスターケンの研究 (Sturken 1996=2004) がある。それらの研究の多くは、いわば個人的な記憶と公的 (集合的) 記憶とのせめぎ合いや、対抗的な記憶の在り様を描いてきた。

しかし、これら先行研究の研究対象と、本稿の対象である日本海海戦の記憶の「現場」の決定的な違いは、日本海海戦が 100 年以上前の出来事であり、それゆえ当事者が現存しておらず、「体験」を欠いているということである。そして後の議論を先取りするならば、本稿は、この「体験の不在」による、個人的な記憶と文化的記憶とのせめぎ合いの無さや、対抗的な記憶の不在こそを指摘するものである。

### (3)

さて、日本社会においては、過去の戦争という出来事についての営みを執り行う集団として戦友会が存在している。本式典は「三笠保存会」という組織が主体となっているが、後に詳述するように、この組織は 1925 年の設立から 1945 年のアジア太平洋戦争の敗戦までは日本海軍の戦友会としての性格を有しており、また敗戦時に解散を経て、1958 年に再び結成されて現在に至っている。その意味で「三笠保存会」は、日本海海戦についての戦友会の性格を有した組織として現存している稀有な例である。そして、現在は日本海海戦との直接の関わりが無くともメンバーシップが可能な組織である。

アジア太平洋戦争の戦友会の現場を観察・考察した先行研究として、高橋三郎らによる考察 (高橋三郎編著 [1983] 2005; 高橋三郎 1984) を参照することができる。そこから本稿の位置付けに関わる重要な指摘をまとめておこう。高橋由典は、戦友会への参与観察を通して、戦友会に集う個人が、過去の自分を想起し、一種のノスタルジーを過去に対して感じることによって、アイデンティティの強化が図られていることを指摘する。戦友会に集う人々にとって、軍隊という原集団は何よりも特殊で過酷な体験を提供してくれた場であるが、同時に、青年期に所属した集団であるがゆえに、ノスタルジーの対象となるのである (高橋由典 [1983] 2005: 122-125)。さらに高橋由典は、戦友会において、成員が「戦闘行動中の死者」に対する集団的自己呈示を行うことを指摘している。それは、戦友会における慰霊行事においてははっきりしたかたちであられるという。「成員たちは、慰霊行事の場であつてと同じように整然と動き、死者に対するさまざまな宗教的儀礼を一致してとりおこなう。一つのまとまりをもった「集団」

が、この行事を通して死者のまえに具体的に呈示される」（高橋由典 [1983] 2005: 131）。ここには「生者と死者の連続」という観念が存在している。死んだ戦友が自分たちとつながっていると考えるからこそ、戦友会の成員は、死者との関係づけを行うのである（高橋由典 [1983] 2005: 133-134）。すなわち、戦友会という集団は、「過去の体験の想起」と「死者」によって規定されているのである<sup>3)</sup>。

翻って、当式典においては、当然のことながら日本海海戦の実体験を有する参加者は存在しない。また、当式典において、「祖国の安寧と繁栄を願い日本海海戦で散華された、日露両将兵の御魂に対し」黙祷が捧げられるものの、それはあくまで形式的なものであり、日本海海戦の「死者」への意識はほぼ皆無である。このように、いわば「体験」と「死者への意識」を欠いた戦友会の現場である当式典において、どのようなことが起こっているのか。また何が可能になっているのか。本稿ではその問いのもと、高橋三郎らによるアジア・太平洋戦争の戦友会についての研究を対置させて、当式典の特徴を明確にしながらか考察を行う。

以下、2章では当式典の舞台である記念艦「三笠」と、当式典の中心組織である「三笠保存会」について説明し、さらに当式典の概要を記述する。

## 2. 「三笠」・「三笠保存会」と式典の概要

### (1)

先ず、当式典の舞台である記念艦「三笠」について説明しておこう。「三笠」は1900年にイギリスのヴィッカーズ造船会社によって建造された日本海軍の戦艦であった。日露戦争時の日本海海戦において当艦は旗艦として戦闘に従事し、連合艦隊司令長官である東郷平八郎がその艦上で指揮を執った。この戦闘開始直後の奇策（結果的に、それが勝敗を決したとされる）「東郷ターン」はよく知られている。しかし、「三笠」は日露戦後の1905年に火薬庫の火災により佐世保港内に爆沈し、その後引き上げられて修理されるも、ワシントン軍縮会議（1921、1922年）において廃艦が決定する。だが、この「三笠」を記念艦として保存しようという声が高まり、1925年にはその保存が正式に閣議決定され、翌1926年に保存工事は完了し、かくして「三笠」は戦艦（Battle Ship）から記念艦（Memorial Ship）へと呼称・用途を変え、横須賀・白浜海岸に鎮座することとなる。その記念艦「三笠」の艦内には、日露戦争にまつわる品々が陳列・一般公開され、1929年度には約20万人の見学者を集めたという（木下2016: 296）。

1945年の敗戦により「三笠」は米軍に接収され、その後荒廃の一途を辿っていたが、小泉信三の呼びかけ（小泉1958）や、米海軍ニミッツ元帥の計らいなどで集まった募金によって、後述する「三笠保存会」が主体となり、海上自衛隊横須賀地方総監部が協力する体制で復元工事が進められ、1961年に復元されて現在に至っている（横須賀市2012: 824-827）。2015年度の総観覧者数は253,356人であった。

その記念艦「三笠」の復元以来、現在に至るまで、毎年5月27日に「三笠」艦上で日本海海戦記念式典が催行されている。この5月27日とは、日本海海戦における歴史的勝利を記念し、

終戦までは海軍記念日として制定されていた日付である。論者は 2007 年および 2014 年から 2018 年に渡って当式典の観察を継続的に行なっている。本稿はその観察に基づく考察である。

(2)

本式典に参加できるのは、来賓を除いて、主に「三笠保存会」の会員に限られている。ここで、「三笠保存会」について説明しておこう。「三笠保存会」は、記念艦「三笠」を管理・運営している公益財団法人である。この「三笠保存会」の前身は、廃艦が決まった「三笠」保存運動のために、1925 年に、東郷平八郎を名誉会長に戴いて設立された同名の組織である(豊田 2016)。そしてこの組織は、日本海軍の「戦友会」としての役割も果たしていた(戦友会研究会 2012: 45)。同会は 1945 年の敗戦時に解散するが、荒廃していた「三笠」復元の機運の中で旧海軍将校らが世話人となって、1958 年に再建される。会長は渋沢敬三であった(豊田 2016)。1960 年に財団法人となり、先述した通り、記念艦「三笠」の復元活動の中心組織となる。その後公益法人制度改革により 2012 年に公益財団法人へ移行した。現在、基本的には希望すれば誰でも「三笠保存会」への入会は可能である。当会の事業報告書によれば、2015 年度末の会員数は、個人会員・法人会員合わせて 3,790 人である。

このように、戦後再建された「三笠保存会」は、戦前・戦時の日本海軍、およびその戦友会との連続性を有した組織である<sup>4)</sup>。しかも、共通の軍隊経験を有さずともメンバーシップが可能な「戦友会」なのである。そして記念艦「三笠」および「三笠保存会」は、海上自衛隊との強い繋がりを有している。先述のように、荒廃した「三笠」の復元工事には海上自衛隊が関わっており<sup>5)</sup>、また現在も艦の修理工事や一部の整備を海上自衛隊が行なっており、さらに海上自衛隊の OB が「三笠保存会」の役職に就いている<sup>6)</sup>。戦後における旧海軍と海上自衛隊との連続性を詳細に明らかにしたアワーの研究(Auer 1972)を踏まえるならば、この「三笠保存会」は、戦前・戦中の海軍から、戦後の海上自衛隊への連続性を体現する組織でもあると言える。

(3)

次いで、本節では、2015 年 5 月 27 日に催行された「日本海海戦 110 周年記念式典」の様子を概略する。論者は「三笠保存会」会員としてこの式典に参加している。

当日の「三笠」は万国旗と紅白の幕で飾り付けされている【写真 1】。

受付を済ませて、式典会場である講堂へ入る【写真 2】。この講堂は、兵員居住区、前部主砲下部や病室であった区画を改造したものであり、座席は 320 席である。前方の座席は来賓者用となっており、式典開始時には設けられた補助席も含めて全ての座席が埋まった。「三笠保存会」の事業報告書によれば、この式典の参加者の合計は 517 名であった<sup>7)</sup>。

式典は 13 時 30 分から始まった。式次第は次の通りである。



写真 1



写真 2

- 一、開式
- 一、国家斉唱
- 一、黙祷
- 一、式辞（三笠保存会会長）
- 一、祝辞（海上自衛隊横須賀地方統監、アメリカ海軍第7艦隊司令官、横須賀市長）
- 一、主要来賓紹介（日本海海戦に関わった人物の係累、国会議員、横須賀市議会議員など）
- 一、祝電披露
- 一、閉式

次いで、講堂では、講談師によって講談『日本海海戦』が披露された【写真3】。こうして講堂での式典は一時間ほどで終了する。その後、上甲板中部において、海上自衛隊横須賀音楽隊による演奏会が催される。式典の参加者のほとんどが移動し、観覧する。この演奏会は、式典参加者でなくとも、当日記念艦「三笠」を訪れている人も観ることができる。観客がぐるりと囲む中で、女性一等海士を進行役として、日本海海戦や日露戦争に関連した楽曲の他、先の大戦の際に歌われた軍歌などを取り混ぜた楽曲が演奏された【写真4】。この演奏会の時間は30分ほどであり、演奏された曲目は以下の通りである。①君が代行進曲、②日本海海戦、③廣瀬中佐、④艦船勤務、⑤鎮魂 同期の桜、⑥巡検ラッパ、⑦海行かば、⑧東京湾凱旋観艦式記念行進曲、⑨海のさきもり、⑩軍艦行進曲。なお、式典中の国家斉唱時、および黙祷中の音楽演奏もこの海上自衛隊横須賀音楽隊が行っている。

以下、この式典について考察を進めていこう。





写真 3



写真 4

### 3. 「平凡化」の事態

#### (1)

式典の観察からまず指摘できるのが、この式典にちりばめられている種々の「演出」である。それは、例えば、「講談」の披露や、海上自衛隊音楽隊による演奏会である。さらに、2007 年（102 周年）の式典においては、「三笠」に寄贈された、日本海海戦当時の連合艦隊の戦艦・巡洋艦に装備されていた「測距儀」がサプライズとしてお披露目され、三笠保存会職員によって、実際の計測の様子の実演が行われていた。これらの「演出」は、モッセが指摘する「平凡化」として理解することができる。「平凡化」とは、「戦争を賞賛して栄光を称えるのではなく、選んで手元に置いておく程度に親しみやすくする」ことである (Mosse 1990=2002: 133)。モッセは、第一次世界大戦期から戦間期にかけてヨーロッパで人気を博した戦争絵はがきや戦争演劇、戦争玩具などを「平凡化」の例に挙げ、それらの流行によって戦争は「畏怖させ怯えさせる存在ではなく、ありふれたものとなり、「民間人は楽しみながら、愛国心や忠誠心を確保し続けることができた」ことを論じている (Mosse 1990=2002: 133, 148)。

ただし、当式典における「演出」は、この「平凡化」が極度に進行した事態である。モッセが論じた「平凡化」の過程においては、多くの退役軍人たちが「戦争の記憶はどうなったのかと嘆」き、「個人的な喪失感を覚えた」という (Mosse 1990=2002: 158)。すなわち、退役軍人という戦争体験者たちが、この「平凡化」に違和感を表明していたのである。しかし、日本海海戦や日露戦争は、もはや遠い過去であり、この式典の現場には、日本海海戦の体験者はもちろん一人もいない。この「体験の不在」によって、当式典においては種々の「演出」——「極度の平凡化」——が可能になっているのである。アスマンは、このような歴史的出来事に関するライブパフォーマンスを検討し、例えばミュージアムのなかで歴史上の日常の場面や、独立戦争の中での合戦を手本どおりに演じる、動く人間によって歴史をよみがえらせるといったパフォーマンスを「生きた歴史」と呼ぶ。そして、そうした「生きた歴史」の「演出」について、

アスマンは次のように指摘している。

どうやらすべての歴史が、「生きた歴史」として演じられることに向くというわけではない。「生きた歴史」となる歴史は、抑制された楽しめるものとして、人々を動揺させる可能性がすべてとり除かれたものでなくてはならない (Assmann 2007=2011: 273)。

この指摘を踏まえるならば、当式典における種々の「演出」は、日本海海戦という出来事が「体験」を欠き、「抑制された楽しめるものとして、人々を動揺させる可能性がすべてとり除かれたもの」であるがゆえに可能になっているものであると言える。事実、この演奏会の観客の中には、旧日本海軍の軍服のレプリカを着用し、「コスプレ」を楽しむ男性も居たのである。

(2)

さらにこの式典において特徴的なのは、日本海海戦という過去の出来事が、いかようにも解釈・意味付けし、また「利用」することが可能になっていることである。例えば、式辞において、日本海海戦および日露戦争は次のように語られる。

(中略) 日露戦争は、まさに自衛のために戦った防衛戦争であり、「三笠」の勇姿を眺める度に、明治の人々の国を守る気概と勇気、戦略性と合理性、そして国家に対する熱い思いを感じざるを得ません。他方、我が国固有の領土である尖閣諸島への中国の無法な侵犯に耐え、北朝鮮による同胞の拉致を許し、竹島及び北方領土を未だに解決できない現状に憂慮せざるを得ません。戦後、我が国は、平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、安全と生存を保持しようとして決意し、防衛を他国に委ね、急速な経済復興を成し遂げ経済大国になりました。しかし、それを可能とした環境も大きく揺らぎ始め、日本は今やかたつてない至難の時代を迎え、真の国民の力量が問われようとしております。

ここでは、日露戦争（日本海海戦）という出来事が、「現在」の文脈において解釈、意味付けされて語られているのである。

このように、当式典における、「体験を欠いた」、先の先の戦争である日本海海戦という過去の出来事が「演出」および「平凡化」され、またいかようにも解釈・意味付けされ、「利用」されている状況を確認した上で、「体験を伴う」、先の戦争に関する戦友会の現場の観察を参照しておこう。

伊藤公雄は、アジア太平洋戦争の戦友会の現場において行われている、過去の「演出」を指摘している。大部隊型の戦友会のメンバーは、強烈な戦中の共有された過去を持つ小部隊型の戦友会とは異なり、共有する過去を持っていない。そのため、共有の戦闘体験とはほとんど関係をもたないと思われる「艦の設計者」を会合に招いたりするという。「彼らは共有の過去を持



たないが故に、新たに共有する過去を創り出す作業を開始せねばならなかったのである。つまり、虚構の共有された過去、フィクションとしての過去を媒介にして、集団としての現在の結合を形成しようとし、また、それを維持しようとしているのである」(伊藤 [1983] 2005: 202)。

それに対し、日本海海戦も、やはり共有の体験を欠いてはいる。だが当式典においては、もはや共有するための「フィクションとしての過去」を作り出すこと自体、必要とはされていないのである。

#### 4. 「政治」の闖入

##### (1)

さらに、当式典において観察できるのは、その「政治」的状况である。先述のように当式典では、横須賀市長が祝辞を述べ、また国会議員、横須賀市議会議員が来賓として来場しており<sup>8)</sup>、防衛大臣や経済産業大臣を始めとして国会議員らからの祝電が寄せられ披露されている。その意味で、この式典は「政治」的なのである。そして、この式典において興味深いのは、日本海海戦や日露戦争とは直接関係の無い在日米海軍との同居という事態が可能になっていることである。当式典には毎年、横須賀に駐在する在日米海軍の第 7 艦隊司令官が来賓として招かれており、2015 年の式典においては、次のような祝辞を述べている。

我々が、家族や友人とこの記念艦「三笠」を見学する時、自由を守るために東郷大將が発せられた“各員一層奮励努力せよ”という命令を思い起こします。この東郷大將の命令は、不確かな世界に生きる我々にも示唆を与えてくれます。米国第 7 艦隊は、海上自衛隊との緊密な連携を誇りに思っております。我々は、この 70 年間、相互に連携し活動、訓練そして作戦を実施し、インドからアジアそして太平洋にわたる海域における平和と安定維持を支援してきました。我々はこの海域を我々のホームと呼べることは幸運であり、この周辺隣国に対する長期にわたる責務の遂行を誇りに思うものであります。

また、祝辞内のジョークに対しても、式典出席者が皆笑い声をあげるなど、極めて親密な雰囲気である。

もちろん、1 章で述べたように、米海軍のニミッツ元帥が荒廃した「三笠」の保存・復元のために一役かったという事情があり、その意味でこの「三笠」に海上自衛隊と米海軍との「海の友情」(阿川 2001)を見いだすこともでき、その証左としてこの同居を理解することもできる。事実、「三笠」はかなり早い段階から、海上自衛隊と在日米海軍の「紐帯」として機能していたことが窺われる<sup>9)</sup>。

しかしながら、アジア太平洋戦争の戦友会と比較するならば、当式典におけるこうした「政治」的状况は、奇異なものである。

## (2)

再びアジア太平洋戦争の戦友会の研究を参照しよう。高橋由典は、戦友会の成員たちが、戦死したかつての同僚に対して積極的意味を与えず、ややもすると戦闘で行った行為に対して否定的評価を行う外部社会を、外集団とみなすこと、そして「戦死者」を政治的に利用する外部社会は、成員たちにとって内集団とはなり得ないことを指摘している（高橋由典 [1983] 2005: 137-138）。同様に、高橋三郎は、戦友会の持つ性格として、「非政治性」を挙げている。「とにかく利用されるのはごめんだという感覚、したがって戦友会としては政治的なものにはかかわりたくないという気持は、戦友会会員にかなり共通したもののようと思われる。そうした気持は政治家や知識人にたいする根強い不信感となってあらわれている」（高橋 1984）。そして高橋三郎はこのようにも予想していた。「戦友会は、これまでもそうであったように、今後も政治化することはないであろうし、また政治的に動員される危険性もないであろう。戦友会というのは戦後におけるひとつの純粋に精神的な「運動」とみなすことができるのではないか、そして戦友会に政治的な意味があるとしたら、それは戦友会の存在自体が戦後の日本社会にたいする暗黙の政治的批判となっている点ではないか」（高橋 1984）。

だとすれば、ここで問われるべきは、先述のような当式典の「政治」的な状況がなぜ可能なのか、ということである。

アジア太平洋戦争の戦友会と「政治」との相容れない状況とは、つまり、戦友会の成員の有する「個人的な記憶」と、「政治」側の公的な記憶とが対立しているということである。「個人的な記憶」を有している戦友会のメンバーにとっての「死んだ戦友」は、政治あるいは政治的局面であらわれてくる抽象的な「戦死者」とは決して重ならず、鋭く対立するのである。スターケン、同様の状況をベトナム戦争の記念碑に見ている。記念碑はふたつのまったく違った性質の想起を引き起こしたのである。そのひとつは、アメリカ帝国主義と男性性を復活させ、ベトナム戦争の歴史を書き換えようと試みている防衛的な歴史物語である。もうひとつは、この戦争で多大な影響をこうむったアメリカ人が——つまり、帰還兵とその家族、戦死者の友人や家族が——自分たちの喪失感、痛み、徒労感などを言葉にすることができるような、襲の入り組んだ複雑な想起の言説であろう（Sturken 1996=2004: 149）。

そして、当式典における「政治」的状況は、それら「対抗的な記憶の不在」の帰結として理解することができる。すなわち、日本海海戦、および日露戦争という出来事からは、もはや「体験」や「死んだ戦友」に関する「個人的な記憶」が欠如している。したがって、個人的な記憶と公的記憶とのせめぎ合いも起こらないのである。それによって、内集団／外集団の区別も無効となり、また「政治」が入り込むことが可能になっているのである。

## 5. 結語

ここまで、日本海海戦の「記憶」の現場である日本海海戦記念式典の観察を通して、日本海海戦という過去の出来事をめぐる営みを考察してきた。特に、「体験」が不在であることによって、どのようなことが起こっているのか、またどのようなことが可能になっているのかを描出し、それを、「体験」を伴うアジア太平洋戦争の戦友会に関する先行研究を対置させながら理解してきた。そこから明らかになった知見は次の通りである。

当式典においては、「体験が不在」であるがゆえに、種々の「演出」が可能となり、「平凡化」され、また、日本海海戦という過去の出来事がいかようにも解釈・意味付けされ、「利用」されているということ。さらに、この「体験の不在」は、「対抗的な記憶の不在」を導き、その帰結として、当式典においては「政治」的な状況が可能になっているということ。

こうした、「歴史の社会学」としての本稿の観察と考察は、戦争の記憶の表象行為に関する歴史社会学的研究や、「体験」を扱ってきた戦争の記憶に関する社会学的研究に、新たな知見を付け加えるものである。また、当然のことながら、現在、日露戦争という「先の先の戦争」のみならず、「先の戦争」であるアジア太平洋戦争の「体験」も消え去りつつある。本稿は、そうしたアジア太平洋戦争の記憶の(今後の)「現場」を考察する際の重要な参照項ともなり得るはずである。

残された課題もある。横須賀という地域社会に堆積している様々な記憶のなかに配置し、検討される必要があるだろう。また 4 章で指摘した在日米軍との関係については、アジア太平洋戦後の日本および横須賀における地政学を重ね合わせて考察する必要がある。それらの検討は、別稿に譲ることとしよう。

### 【註】

- 1) この 110 周年記念式典を考察の主な対象に据えたのは、当式典が 110 周年という切りの良い周年であり、別の年の式典と比べて、その特徴が際立っているからである。
- 2) 慰霊・追悼研究の動向に関しては、栗津 (2015) に詳しい。
- 3) また、ウォーナーは、アメリカの戦没者記念日である「メモリアル・デイ」に関する分析において、戦没者たちの死が「国家の祭壇に捧げられた犠牲」として語られ、また意識されることで、様々な人種や宗教、階層の人々が、「アメリカ国民」として統合されることを指摘している (Warner 1952=1997)。
- 4) 実際、戦後の「三笠保存会」の理事には、多くの元海軍次官や海軍中将、海軍少将らが名を連ねている (豊田 2016 : 521-522)。
- 5) 当時実際に業務を担当した自衛官はこう回想している。「(中略) 即ち復元工事は建物の撤去、砂の充填等の施設関連工事部門は管理課が担当し、船体艤装工事部門は艦船課が担当して三笠保存会と協議のうえおこなわれた。工事は昭和 35 年から昭和 36 年にかけて行われ浦賀ドックと石川島播磨重工業 (IHI)

が施工した。昭和 36 年 5 月 27 日記念艦「三笠」の復元式典が施工された、マストに Z 旗が再び翻り、風薫る大空に P2V の編隊が祝賀飛行で上空を航過した時まことにはれば（ママ）とした気持で、日本海軍の偉大な遺産が現実的に継承されてゆくことに無上の歓びを感じた」（なごみ会文集委員会編 2004: 143）。

- 6) そのことは、例えば、海軍兵学校、および海軍大尉を経て、海上警備隊に入隊し、横須賀地方総監まで勤めた後に、海上自衛隊退官後は、三笠保存会の理事長・顧問を歴任した常廣栄一氏の履歴が何よりも物語っている（三笠保存会会員に配布された、私家版『「三笠」語り継ぐ想い 常廣栄一遺稿集』による）。
- 7) 「三笠保存会」の平成 27 年度事業報告書による。
- 8) 「三笠保存会」の平成 27 年度事業報告書によれば、当式典に来賓として参加した「議員等」の数は 24 人である。
- 9) 例えば、横須賀基地連絡官として勤務していたある元海上自衛官は、昭和 36 年（1961 年）に山梨勝之進元海軍大將らが在日米海軍司令官を訪問した際のことを、こう回想している。「日頃の海上自衛隊に対する支援に御礼を申し上げ、特に本日参ったのは軍艦三笠の復元工事が予定通りに順調に進んでおりわれわれは大変喜んでます。工事の間 US NAVY は工事関係について基地の開放、米軍が接收した旧三笠の調度品の返還、補修整備資材の支給等誠に有り難い支援に感謝を申し上げに来ました。三笠艦は世界海軍遺産です。」との概要の話を切々と静かにゆっくりお話しされる老提督の話に Withington 少将は感激したように山梨大將の眼をじっと見つめたまま聞いていた。このシーンは一生私の脳裏から離れないだろう」（なごみ会文集委員会編 2004: 89）。

## 【文献】

- 阿部安成、1999、「横浜履歴という履歴の書法——〈記念すること〉の歴史意識」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己編『記憶のかたち』柏書房。
- 阿川尚之、2001、『海の友情』中公新書。
- Assmann, A., 2007, *Geschichte im Gedächtnis*. München: C.H.Beck. (=2011、磯崎康太郎訳『記憶のなかの歴史——個人的経験から公的演出へ』松籟社.)
- Auer, James E., 1972 妹尾作太男訳『よみがえる日本海軍（上）』時事通信社。
- 栗津賢太、2015、「〈研究動向〉慰霊・追悼研究の現在」『思想』No.1096（2015 年 8 月）：8-26。
- 伊藤公雄、[1983] 2005、「戦中派世代と戦友会」高橋三郎編著『共同研究 戦友会（新装版）』インパクト出版会。
- 福田雄、2011、「われわれが災禍を悼むとき——長崎市原爆慰霊行事にみられる儀礼の通時的変遷——」『ソシオロジ』56（2）：77-94。
- 浜日出夫、2007、「歴史と記憶」長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学』有斐閣。
- 木下直之、2016、『近くても遠い場所——一八五〇年から二〇〇〇年のニッポンへ』晶文社。

小泉信三、1958、「三笠保存と自重の精神」『日本週報』1958年11月25日号: 4-9.

Mosse, George L., 1990, *Fallen Soldiers: Reshaping the Memory of the World Wars*, New York and Oxford: Oxford University Press. (=2002、宮武実知子訳『英霊——創られた世界大戦の記憶』柏書房.)

なごみ会 (海上自衛隊 75 期会) 文集委員会編、2004、『海上自衛隊と私達』.

Nora, P., 1984, “Entre Memoire et Histoire,” *Les Lieux de Memoire*, Editions Gallimard. (=2002、「記憶と歴史のはざまに」谷川稔監訳『記憶の場 1』岩波書店.)

Rosenberg, E. S., 2003, *A Date Which Will Live: Pearl Harbor in American Memory*, Duke University Press. (=2007、飯倉章訳『アメリカは忘れない』法政大学出版局.)

戦友会研究会、2012、『戦友会研究ノート』青弓社.

Sturken, Marita., 1997, *Tangled Memories: The Vietnam War, the AIDS Epidemic, and the Politics of Remembering*. (=2004、岩崎稔・杉山茂・千田有紀・高橋明史・平山陽洋訳『アメリカという記憶』未来社.)

高橋三郎編著、[1983] 2005、『共同研究 戦友会 (新装版)』インパクト出版会.

高橋由典、[1983] 2005、「戦友会をつくる人びと」高橋三郎編著『共同研究 戦友会 (新装版)』インパクト出版会.

高橋三郎、1984、「戦友会研究の中から」『世界』第 459 号: 310-316.

豊田穰、2016、『旗艦「三笠」の生涯』光人社 NF 文庫.

Warner, W. L., 1952, *Structure of American Life*, Edinburgh at the University Press. (=1997、嶋澄訳『アメリカ人の生活構造』みき書房.)

横須賀市、2012、『新横須賀市史 別編 軍事』.

(つかだ しゅういち 東京都市大学・大妻女子大学非常勤講師)